

資料

## 小児看護学実習における看護学生の報告に関する現状と課題

名古屋 亮子・中西 順子

純真学園大学 保健医療学部 看護学科

Current status and issues associated with reporting of pediatric nursing experiences by nursing students undergoing practical training

Ryoko NAGOYA, Junko NAKANISHI

Department of Nurse, Faculty of Health Science, Junshin Gakuen University

要旨：本研究の目的は、学生が臨地実習で行う報告の現状を明らかにし、小児看護学実習での報告が適切に行えるための教育方法の示唆を得ることである。

本研究は、A大学で2015年度前期の小児看護援助論Ⅱの講義を受講した学生92名と、2015年度後期の小児看護学実習を履修した学生85名を対象とし、作成した無記名自記式質問紙票をもとに、報告についての調査を実施した。結果の分析は、自由記載された内容を意味内容の類似性や特徴性を踏まえサブカテゴリー化を行い、さらに抽象化しカテゴリーの生成を行った。結果【報告の型へのとらわれ】【看護スタッフの動きに左右される】【報告のタイミングがつかめない】【報告すべきことがわからない】【情報の優先度がわからない】【緊張で硬くなる】【事前知識があると整理できる】の7つのカテゴリーが抽出された。

キーワード：小児看護学実習、報告、看護学生

Abstract: The present study investigated the current status of reporting by nursing students undergoing practical training in order to provide recommendations for feasible education strategies to develop students' reporting abilities during pediatric nursing practical training. We recruited 92 nursing students who attended the "Child Health Nursing Care II" class in the first semester of the 2015 fiscal year and 85 students who completed the pediatric nursing practical training course in the second semester at University A. Participants completed an anonymous self-administered questionnaire involving "yes" or "no" questions. Responses were counted and subcategories extracted from the comments based on similarities and characteristics of semantic contents. The subcategories were abstracted to generate categories. The results of the questionnaire indicated factors that made reporting difficult to be: "difficulty deciding when to report," "ambiguity regarding what is to be reported," and "difficulty associated with reporting in pediatric nursing, including care for families." Factors that enabled reporting were: "review for proper reporting," "support by an instructor or other similar members/experts," and "prior preparation." Our findings highlight the need for training strategies aimed at alleviating students' difficulties in reporting.

Keyword: Pediatric nursing practice, reporting, nursing students

### I. 緒言

報告とは、ある任務を与えられた者が、その経過や結果などを述べることである<sup>1)</sup>。医療現場では、交わされた情報をもとに医師や担当者が判断して患者に必要な行為が決定されることとなるため、発信者がいかに正確に情報を伝えられるかが大変重要となる<sup>2)</sup>。臨地実習は、看護の知識・技術を統合し、実践へ適応する能力を育成する教育

方法の一つである<sup>3)</sup>。学生は患者を受け持ち、看護を実践していく。医療チームの一員として患者とかかわる学生は、実施した看護援助を報告する義務がある。小児看護学実習の場合は、対象である子どもが成長発達段階にあり、対象者自身が症状や思いを言葉で伝えることが困難なことが多く、医療者は子どもや家族から得たその時々情報を共有することが重要である。また、子どもの療養

は環境に影響されやすく、同胞を含めた家族の状態に関する情報交換も必要である。よって臨地実習において学生が指導者に報告する内容は、子どもの病状に関することに加え、成長発達に関すること、家族のことなど多種多様となる。さらに急性期にある子どもでは、状態が変化しやすく迅速な報告が求められる。しかし小児看護学実習を終えた学生からは「報告は難しい」という声が多く聞かれた。実際、観察内容が伝えられていなかったり、受け持ち患児の成長発達に沿ったアセスメントができていなかったり、家族が漏らした言葉を指導者に伝えていないなど、報告内容が不十分なことがあった。

臨地実習で学生が、各々の場面で適切な報告を行うためには専門的な知識、アセスメント力に加えコミュニケーション能力が必要となる。最近の若者はスマートフォンの普及、LINE アプリケーションなどによるスピーディなやり取りのため、単語のみあるいは簡略された言葉でのやり取りが多く<sup>4)</sup>、コミュニケーションを苦手<sup>5)</sup>としている。実習という場の雰囲気の中で報告することに「怖い・緊張」「焦り・慌てる」という感情をもち、報告を躊躇することがあると報告されている<sup>6)</sup>。日頃省略語を多用するために表現方法が乏しく、報告する場面でどのような言葉を用い、どの順番で発言して良いか戸惑うものと考える。

以上のことから、学生が臨地実習における報告の意義を理解し、小児看護学実習で適切な報告ができるような教育方法の検討が必要であると考え

た。しかし小児看護学実習における報告に関する研究は少ない。そのためまず学生の報告について現状を調査し、小児看護学実習において適切に報告するための教育方法についての課題を明らかにする必要があると考えた。

本研究の目的は、学生が臨地実習の報告の現状を明らかにするとともに、小児看護学実習で行う報告が適切に行えるための教育方法の示唆を得ることである。

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象

2015年度前期の小児看護援助論Ⅱを受講した学生92名のうち、回答があった53名と、2015年度後期の小児看護学実習を受講した学生85名のうち回答があった63名を研究対象とした。

### 2. 報告に関する教育の構造

報告に関する小児看護学の教育の構造については、表1に示すとおりである。報告の方法に関しては、SBARを用いた。SBARとは確実に意見を伝えるコミュニケーションエラー防止対策の一つのツールであり、S (Situation, 状況), B (Background, 背景), A (Assessment, 評価), R (Recommendation, 提案)の頭文字をとったもの<sup>7)</sup>である。学生にはわかりやすいようにSの前にI (Identify, 報告者と患者の同定)と、Rの後にC (Confirm, 口頭指示の復唱確認)を用い、I-SBAR-Cの形態で演習を行った。

表1 報告に関する教育の構造

科目名	開講時期	授業形態	単位数	時間数	到達目標 / 主な教育内容・方法
小児看護援助論Ⅱ	3年前期	演習	2	60	1. 到達目標 1) 小児看護学に必要な看護実践能力を習得することができる。 2) 子どもの発達段階や健康状態に応じた看護を説明することができる。 3) 自己の小児看護技術習得に向けた課題を述べるすることができる。 2. 主な教育内容・方法 こどもの日常生活援助と診療の補助技術について事例を用いながら演習する。
小児看護学実習	3年後期	実習	2	90	1. 到達目標 1) 子どもや家族の人権を尊重したかわりができる。 2) 子どもと家族が必要とする援助を理解し、成長発達段階に応じた看護を実践することができる。 3) 小児保健・医療・福祉・教育の中での看護職者の役割を理解し、小児看護師としての態度を養うことができる。 2. 主な教育内容・方法 1) 実習期間は2週間 2) 保育園実習と病院・施設実習を行う

小児看護援助論Ⅱの講義内では学習目標を「報告方法がわかる」とし正確な報告の重要性とI-SBAR-Cについて説明を行った。その後一事例を用いて学生が報告内容をI-SBAR-Cの項目ごとにまとめる用紙に記入し、学生同士または教員を相手に報告シミュレーションを行った。

同年に行われた3年次後期の小児看護学実習でSBARを意識した報告を実施した。

### 3. データ収集方法

報告に関する無記名自記式質問紙票を作成し、小児看護援助論Ⅱ演習終了後調査（以下：実習前調査）は、小児看護援助論Ⅱの成績が確定した2015年10月に実施した。小児看護学実習後調査（以下：実習後調査）は、小児看護学実習の成績が確定した2016年10月に実施した。

調査内容として実習前調査は、今までの実習の報告で戸惑ったり困った経験、SBARに関すること、報告方法の練習の必要性とした。実習後調査は、病院・施設実習で報告に関して印象に残ったこと、報告で困ったこと、医療スタッフとの関わり、報告を難しいと感じたこと、学内での報告の演習についてとした。

### 4. データ分析方法

本研究では報告に対する学生の現状と小児看護学実習における課題を明らかにするため、小児看護援助論Ⅱ演習終了後と小児看護学実習後に実施した報告に対する調査の自由記載された内容の一文脈をコード化し、意味内容の類似性や特徴性を踏まえサブカテゴリー化を行い、さらに抽象化しカテゴリーの生成を行った。データの分析において信頼性を得るため研究者間で検討を重ねた。

## Ⅲ. 倫理的配慮

研究対象者対して、調査の目的と方法、個人情報保護について文書および口頭で説明を行った。また、調査への協力の有無は自由意思であり、評価に反映されないこと、研究の途中であっても中止できることを保証した。調査の実施は、学生に不利益が生じないように小児看護援助論Ⅱおよび小児看護学実習の成績評価公表後とした。さらに、個人が特定できないように調査用紙は無記名とし、

得られたデータは記号化し、研究者以外にはわからないようにした。なお、本研究は純真学園大学倫理委員会の承認を得て行った。（承認番号23）

本研究における利益相反はない。

## Ⅳ. 結果

1. 実習前調査は、92名中53部回収で、回収率は62.3%であった。実習後調査は、85名中63部回収で、回収率 74.1%であった。

### 2. 実習前の報告に対する記述内容

実習前の報告に対する記述内容から抽出されたコード数は40、サブカテゴリーは8、カテゴリーは5つに分類された。

以下、【 】内はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリー [ ] はコード数を示す。

1) 【報告の練習体験が必要】[18コード、3サブカテゴリー]

このカテゴリーは〈知識だけでは報告できない〉、〈報告方法がわからない〉、〈練習することで報告しやすくなる〉の3つのサブカテゴリーから集約された。学生は報告の経験が不足しているため上手く報告できていない。練習回数をかさねることで報告がしやすくなると考えていることが示された。

2) 【報告すべき内容の知識不足】[16コード、2サブカテゴリー]

このカテゴリーは、〈報告の内容がわからない〉、〈報告の優先順位がわからない〉の2つのサブカテゴリーから集約された。学生は報告の内容、優先順位をどうすべきかとまどい、困った経験を持っていた。

3) 【指導者に対する緊張感】[4コード]

このカテゴリーでは、学生が指導者を前にすると緊張してしまうことが示された。

4) 【報告は身につけるべき技術である】[4コード]

このカテゴリーでは、学生は報告が臨地実習や就職してからでも必要であり、練習を行う重要性を認識していることが示された。

5) 【報告のタイミングがつかめない】[3コード]

このカテゴリーでは、学生が報告をどのタイミングで行ったら良いかとまどっていることが示された（表2）。

表2 実習前の報告に対する記述内容

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
報告の練習体験が必要	知識だけでは報告できない	初めて演習した時の思うように報告できない難しさを実感することが自身の修正すべき点に気付くことへとつながると思うため
		実施してみるとどこができていないか確認できるため
		経験が全然足りない
		演習しなくちゃできないと思う。
		演習でやらないと病棟でできないからです。
		やり方だけを知っていても本番はすぐにするのは難しい
	報告の方法がわからない	文面で見ただけでは理解できても実行に移すことは難しい
		演習をせずに、すぐに実習先ではできないと思う。
		報告の仕方を知らなかった。
		報告の仕方が分らない。
	練習をすると報告しやすくなる	バイタルサイン測定の報告順番や呼び方
		自分なりのアセスメントをしようと思うが、どのように伝えればよいかわからない
		適切な言葉をみつけることができず伝える際に困った。
		全部報告した後に、その他は？と聞かれた時何もいえなかった。
		いきなり実習先で報告するより事前に練習したほうがよいと思う
		一回やってみると、報告しやすいと思う
報告すべき内容の知識不足	報告の内容がわからない	回数を重ねることで身に付くと思う
		まったく報告の仕方がわからないので、演習でイメージをつけることができる
		すぐにはできないと思うので、必要だと思う。
		何を報告していいかわからない。
	報告の優先順位がわからない	バイタルの結果以外の何を伝えてよいかわからない。
		伝えたいことがうまく伝えられなかったりする
		言葉がまとまらない。伝えるべき言葉がわからない
		こんな報告していいのかと不安になる。
		看護師へどうしてほしいかを伝えることが難しかった
		何を一番に伝えたいかわからなかったから
指導者に対する緊張感	指導者の前では緊張する	重要度や優先度がぐちゃぐちゃになってしまい、何が大切かわからない報告になったから
		何気ない発見が、重要か重要でないかわからない不安になるため
		情報の重要度がわからないから
		指導者の方に報告すること事体に緊張し、とまどってしまった。
報告は身につけるべき技術である	報告は必要である	指導者さんの前に立つと、緊張してしまう。
		看護師がいそがしいのがつたわること
		医療者に対し恐怖心がある。
		実習や臨床の間では報告に必須だから
報告のタイミングがつかめない	報告のタイミングがつかめない	実際に実習に行くと、報告する必要があるの、練習していた方がよいと思う。
		実習や現場で働くときに必要になるので例を示して演習する必要がある。
		報告ミスで医療事故につながらないようにする。
		タイミングがわからない。
報告のタイミングがつかめない	報告のタイミングがつかめない	看護師さんが忙しそうでタイミングがつかめなかったことがあった。
		忙しそうにしていたら報告しにくい

### 3. 実習後の報告に関する記述内容

実習後の報告に関する記述内容から抽出されたコード数は49、サブカテゴリーは15、カテゴリーは7つに分類された。

#### 1) 【報告の型へのとらわれ】[11コード、4サブカテゴリー]

このカテゴリーは〈報告の方法が難しい〉、〈報告内容の取捨選択が難しい〉、〈報告内容をまとめる事が難しい〉、〈報告の方法がわからない〉の4つのサブカテゴリーから集約された。学生は、得られた情報を報告前に整理する段階を困難に感じていることが示された。

#### 2) 【看護スタッフの動きに左右される】[9コード、2サブカテゴリー]

このカテゴリーは〈看護師が忙しそうで声を掛

けづらい〉、〈担当看護師が見つからなくて報告が遅れた〉の2つのサブカテゴリーから集約された。報告が、看護師の業務に左右されていることが示された。

#### 3) 【報告のタイミングがつかめない】[8コード、2サブカテゴリー]

このカテゴリーは〈報告したいときに看護師を見つけれない〉、〈いつ報告して良いかわからない〉の2つのサブカテゴリーから集約された。学生が報告するタイミングをつかむことに困難を感じていることが示された。

#### 4) 【報告すべきことがわからない】[8コード、2サブカテゴリー]

このカテゴリーは〈報告する内容がわからない〉、〈患児と家族両方を踏まえた報告が難しい〉



の2つのサブカテゴリーから集約された。報告すべき内容を理解できていないことが示された。

#### 5) 【情報の優先度がわからない】[6コード, 2サブカテゴリー]

このカテゴリーは〈限られた時間の中で必要な報告をする難しさ〉, 〈何を優先させるか迷う〉, の2つのサブカテゴリーから集約された。得られた情報の優先順位を決めることに困難を感じていることが示された。

#### 6) 【緊張で硬くなる】[3コード]

このカテゴリーは〈指導者に対する負の感情〉

が示された。

#### 7) 【事前知識があると整理できる】[6コード, 2サブカテゴリー]

このカテゴリーは〈事前に演習することが出来た〉, 〈報告前に整理した〉の2つのサブカテゴリーから集約された。

学生は短時間で正確に報告する等適切な報告をするために検討していた。また, 事前学習が活かされたことや事前に報告内容をまとめることで報告に困らなかった学生がいた。(表3)。

表3 実習後の報告に関する記述内容

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
報告の型へのとらわれ	報告の方法が難しい	バイタルの報告の仕方
		ISBAR-Cの方法が難しかった
		ISBAR-Cに慣れていなかったため深い所まで追及され、勉強不足で答えられなかった。
	報告内容の取捨選択がむずかしい	報告すべき事か否かの線引きが難しい。
		自分が聞いたことが、報告していいことか分からなかった。どこまで報告したらいいか分からない
看護スタッフの動きに左右される	報告の内容をまとめる事が難しい	事細かく事実、アセスメントを含め簡潔にまとめる事が難しかった。
		アセスメントを頭の中でしなければいけなかったから。知識がなくてできませんでした。
	報告の方法がわからない	内容をまとめるのが難しかった どう報告してよいかわからなかった。
報告のタイミングがつかめない	看護スタッフが忙しそうで声を掛けづらい	スタッフや看護師が忙しそうで報告しづらかった。 Nsが忙しそうで声を掛けづらかった。 報告しようとしてケア中のことが多かった 看護師がいつもいそがしそうにしていたため。 指導者が忙しそうであった。 忙しそうで報告しづらい(部屋に入りきっているから)
	看護師が見つからなくて報告が遅れた	部屋持ちNsが見つからなくて報告が遅れた 指導者を探す事が難しく報告が遅れてしまった。 忙しく、報告が遅れたところがあった。
報告すべきことがわからない	報告したいときに看護師を見つけれない	報告したくてもつかまらない なかなか報告するのを見つけれない 報告すべき人がいないとき 指導者がどこにいるのかわからず早く報告しなくちゃいけないものの中々できず難しかった いつ報告して良いかわからない
	いつ報告して良いかわからない	看護師が多忙であったこともあり、連絡調整をはかることに難しさを感じた。 忙しそうで報告するタイミングが難しい 話しかけるタイミングが分からなかった。
情報の優先度がわからない	報告する内容がわからない	子どもとの関わり方の中でどこから報告するのかわからない事があった。 成人とは違う対象のS情報をうまく扱え取れずに悩み、難しいと感じた 他の領域と違ったから 何を報告すべきかわからなかったから 重症心身障がい児者だったため、報告すべき内容が分からなかったため。
	患児と家族両方を踏まえた報告が難しい	患児と家族両方を踏まえた報告が難しい 家族との関わりの中で、報告すべき内容とそうでないものの判別が難しかった。 家族の思っていることを伝えるのが難しかった
緊張で硬くなる	限られた時間の中で必要な報告をする難しさ	限られた時間の中で必要な情報の報告をするから Nsの方も忙しいため、短い時間で正確に報告しないといけないため(2) 緊急性が高いため、報告の際はすばやく伝えなければいけないが難しい 見たことをそのまま伝えればよいと言われたが、うまく伝えようとして言葉につまってしまうことがあった
	何を優先させるか迷う	何を優先させるか迷った 緊急度が難しかった
事前知識があると整理できる	指導者に対する負の感情	怖いという印象で緊張感がありすぎた 指導者が怖い言い方がきつい 思った返答がもらえずつらかった
	事前に演習することが出来た	学校で練習できていた 練習していたため困ったことはなかった
事前知識があると整理できる	報告前に整理した	報告前に整理したので 自分でまとめて報告できたから

## V. 考察

### 1. 報告すべき内容の理解について

実習前調査で【報告すべき内容の知識不足】と、実習後調査で【報告すべきことがわからない】【情報の優先度がわからない】というカテゴリーが抽出された。臨地実習における報告は、学生が観察したことや実施した結果であるが、小児看護では子どもとの遊びの中の反応や、親の何気ない言葉が重要であったりする。そのため学生は〈報告する内容がわからない〉と困り、〈限られた時間で必要な報告をするのが難しい〉〈何を優先させるか迷う〉と報告の重要性・優先度に戸惑っていた。報告の「重要性、優先度」は対象を理解できていなければ何が重要で、優先度が上なのかアセスメントすることができない。小児看護学では対象が子どもで、体が未熟なため体調が変化しやすく速やかな報告を要する場合が多い。さらに子どもは成長発達段階にあり、その時々の子の成長を加味したアセスメント力が求められるため、対象理解への学習支援が重要となる。

また、サブカテゴリー〈患児と家族両方を踏まえた報告が難しい〉に示されるように小児看護学実習は対象の子どもだけでなく、家族を含めた看護が必要である。学生も病院・施設実習を通して家族に関する報告を行うことがある。家族は子どもの代弁者であると同時に、家族自体が不安を感じ、学生へ質問されることがある。子どもの成長発達に合わせ、家族の不安も多様であるが、学生はそれが報告する必要があるか理解せずに実習を終了することがある。病棟から控室に戻り、教員との振り返りの中で報告が必要であったことがわかり、そのまま病棟へ戻り、報告するということが毎年の実習の中で起こりえる。阿部らは学生は予期していない状況では、信頼を得られない自分に焦りや不安を抱きやすいため、受け持ち患児の病態生理を正しく理解できるよう支援することが特に重要と述べている<sup>8)</sup>。そのため、小児看護学実習における報告は、まず学内において病態生理を正しく理解するための知識が得られる講義を行い、実技演習の中に家族や兄弟を含めた複数の事例を用いたシミュレーションを行うことで、報告すべき内容の理解を深め、アセスメント力の強化を図る必要がある。

### 2. 報告方法の習得について

実習前調査で学生は、〈知識だけでは報告できない〉が、〈練習することで報告しやすくなる〉【報告の練習体験が必要】と考えていた。また、報告が臨地実習や就職してからでも必要であり【報告は身につけるべき技術である】と認識していた。しかし、実習後〈報告の方法が難しい〉〈報告内容の取捨選択が難しい〉〈報告内容をまとめる事が難しい〉〈報告の方法がわからない〉【報告の型へのとらわれ】が生じていた。安酸は、優れた技術者になるためには徹底的に既存の優れた知的技能・運動技能の「型」をまねることが過程として必要だ<sup>9)</sup>と述べている。今回の研究ではSBARを用い練習して実習に臨んでいるが、実習後調査でSBARの報告方法については「難しかった」や、報告方法が「他領域と違った」との意見があった。実習後調査では、〈事前に演習することが出来た〉、〈報告前に整理した〉ことで【事前知識があると整理できる】が抽出された。このことから、SBARや5W1H(When, Where, Who, What, Why, How)など学生の意見を取り入れ、学生が報告しやすい型を検討し、報告方法の技術を習得できるよう演習を積み重ねる必要がある。

### 3. 報告のタイミングについて

学生は、臨地実習で〈看護師が忙しそうで声を掛けづらい〉、〈担当看護師が見つからなくて報告が遅れた〉と【看護スタッフの動きに左右される】状態があり、〈報告したいときに看護師を見つけれない〉、〈いつ報告して良いかわからない〉と、【報告のタイミングがつかめない】と戸惑い、報告が遅延することがあった。報告のタイミングに関しては、コミュニケーション力の未熟な学生にとって、忙しそうに動いている指導者に声を掛ける機会を上手くとらえられなかったことは容易に想像がつく。入院期間の短縮に伴い、病院では患者に対する援助や業務で忙しい日々が続く。小児看護学実習では病院・施設実習を4日間で行うため、学生は短期間での病院・施設実習で指導者のタイミングを見極めることは困難を感じやすい。教員は病棟の状況を見ながら、学生が自分自身で報告の機会を得るためにどう対処するか考え、行動できるよう調整する必要がある。

また、【指導者に対する緊張感】や、〈指導者に対する負の感情〉により【緊張で硬くなる】と報告にストレスを感じていることが明らかとなった。中島らは母性看護学実習における学生のストレスで「報告に関連した未熟さ・不安・緊張」について報告できない、質問に答えられないといったストレスを抱えていると報告している<sup>10)</sup>。重岡らは実習前のストレスとして「申し送り報告ができない」が多かった<sup>11)</sup>ことを報告している。一方で沖野らは看護学生は臨地実習において、努力して援助することで、患者からの肯定的反応を得る体験は看護の遂行や忍耐強さを高める結果になったと報告している<sup>12)</sup>。また、南は現代の「幸せな若者」についての研究で、「コンサマトリー（自己充足的）化している若者たちも案外幸せで、いろいろなものを求めている若者たちがそれ以上に幸せであるということになる」と報告している<sup>13)</sup>。実習というストレスフルな現場でありながらも、将来の自己の職業体験を通し、「報告」という1つの方法ではありながらも努力して上手くなるという体験を通し、達成感を得ることで幸せな感情をもつことにつながる。そのため、指導する側は、なぜ報告ができないのかという視点でなく、学生の忍耐と努力を認めて、報告ができるように「聞く」体制をもって指導・支援する人的環境の調整が必要である。

## VII. 研究の限界

本研究は、1学年の授業における演習と小児看護学実習に限って得られたものであり、一般化は困難である。また調査は学生に不利益が生じないように小児看護学援助論Ⅱと小児看護学実習、それぞれの成績確定後に行ったため、授業後の調査は小児看護学援助論Ⅱの演習4か月後、実習後調査は小児看護学実習後半年から1年の期間が経過していた。また小児看護学実習が授業後3ヶ月～8ヶ月に行うため、授業の体験を想起できるのには差が生じた可能性がある。さらに、実習後調査では小児看護学実習から調査までに他領域の実習も経験するため、影響を受けた可能性がある。今後は学生が体験した直後に調査ができるように研究方法を検討し、報告の困難さに対応できるようにしていく必要がある。

## VIII. 結語

看護系大学生3年生への臨地実習における報告に関する小児看護学実習前、後の調査より以下ことが示唆された。

1. 報告すべき内容の理解を深めるために、対象の病態生理や成長発達、家族を含めたアセスメント力の強化が必要である。
2. 報告方法を習得するためには、学生が報告しやすい型を検討し、技術として演習を積み重ねることが必要である。
3. 報告のタイミングをはかることは感情に左右される行動であるため、人的環境の調整が必要である。

## 謝辞

本研究に協力いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) デジタル大辞泉, <https://kotobank.jp/word/%E5%A0%B1%E5%91%8A-627512>
- 2) 東京慈恵会医科大学付属病院看護部・医療安全管理部編著 “TeamSTEPPS<sup>®</sup>を活用したヒューマンエラー防止策 SBARを中心とした医療安全のコミュニケーションツール” 日本看護協会出版会, 43, 2017
- 3) 文部科学省, 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～, 2017-10-, 2019-7-30 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf)
- 4) 小玉有子, 齋藤三千政, 戸来睦雄, 学生の感情を表す語彙と情動スキルの変化, 弘前医療福祉大学紀要 7 (1), 25-32, 2016
- 5) 佐藤美幸, 柿並洋子, A 大学看護学生のコミュニケーションおよび行動の傾向, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル 7 (1), 15-19, 2014
- 6) 堀律子, 橋本宜子: 看護学生「報告」に関するリスクマネジメントーグループディスカッションによるインシデントの要因及び対策の検討ー, 日本看護学会論文集 (看護管理), 41, 110-113, 2011
- 7) 前出2), 42-43
- 8) 阿部裕美, 佐藤佳代子, 合田友美, 看護学生と受持ち患児の母親との関係形成に向けた効果的支援の検討ー母親とのかかわりの中で困惑した場面に焦点を当ててー, 川崎医療短期大学紀要 31, 21-26, 2011

- 9) 安酸文子 “経験型実習教育 看護師をはぐくむ理論と実践” 医学書院, 7, 2015
- 10) 中島久美子, 早川有子, 母性看護学実習における学生のストレスと対処行動から捉えた実習指導の課題, 群馬パース大学紀要 17, 17-27, 2014
- 11) 重岡秀子, 池本かつみ, 石崎文子他, 成人看護学実習前・後における学生が感じるストレス感情と不安状態の実態, 健康科学と人間形成 2 (1), 17-26, 2016
- 12) 沖野良枝, 大山由起子, 辻岡芳美ほか, 看護学生の臨地実習における態度関連要因と特性的自己効力感の変化, メンタルヘルスの社会学 (9) 25-33, 2003
- 13) 南学, 現代の若者の価値観と友人関係, 三重大学教育学部紀要 69, 教育科学 221-227, 2018